

熊野王子關係書抄録集

熊野王子關係書抄録集

目次

一、後鳥羽院熊野御幸記考證		(2)
二、熊野王子考上		(10)
三、紀伊國王子社略記		(16)
四、後鳥羽院之熊野御幸 御度数及供奉員		(21)
五、熊野懷紙寫		(28)

後鳥羽院熊野御幸記考證

後鳥羽院熊野御幸記考證

(官幣中社那智神社宮司 島野 盛服)

一、後鳥羽院熊野御幸記と申すは、元京極中納言藤原定家卿の日記なる明月記の中より

(二〇一年)
自建仁元年十月五日
至 全 年 全月廿七日 二十三日間、卿が後鳥羽上皇の熊野御幸に供奉中の日記を、後人が抄録して一巻となしたものでなり。

【定家自筆ノ御幸記トイフモノアレバ後人ノ抄録ト云フハイカビアラシキ事ナリ(宇井)】

一、此供奉の時卿は年四十歳にして、官は左近衛權少將なりしなり。

一、此一巻は熊野坐神社の神庫に藏せる写本を。伊藤宮司に借りて謄写したるものでなり。寫本は草字体の自文にて誠に読み難く解も難し。今謄写に當りて読み易からんことを欲し、字体を明らかにし、且つ試みに妄りに割点を附したり、恐るは誤あらんことを識者後人之を校訂せらるゝあらは幸甚。

【熊野坐神社ニアル写本ハ飛鳥井和章の筆ニテ徳川頼宣ノ寄進ナリ(中根)】

一、前項写本の題目ハ「熊野道之間愚記略々」とありしも、普通此一巻を御幸記と称するを以て從ひ題目を更めたり。

一、尚舊記に依れば、本巻第一日即ち建仁元年十月五日の前兩日、左の御幸あらせられたるが如し。

一日 熊野御幸御精進被始之

二日 日吉御幸

一、本巻行幸の重立たる供奉員は大略左記の如くなりしが如し、本文中に記載せる名に基き又ハ官職によりて、「公卿補任」「人名辞書」等につき調査したり、又本文中に其名を見ざるも御途

次の歌御会に見えたる人々をも補記す。

建仁御幸供法員

内大臣右近衛大將 皇太弟傳 源 道親

權中納言春宮權大夫 藤原 宗頼

左衛門督 藤原 信清

参議左近中將 藤原 公經

從三位 藤原 仲經

大宰大貳 藤原 範光

從三位右中將 源 通光

右中將 藤原 保家

左近衛權少將 藤原 定家

右衛門督^(兵衛?) 藤原 隆清

春宮權亮 源 定通

正二位春宮太夫 藤原 忠經

右少將 源 有雅

右近衛少將 藤原 忠信

宮内卿 源 俊家^{宗?}

右馬頭 藤原 親兼

因幡守^ハ 源 通方

左中辨 藤原 長房

皇后太夫宮少進 藤原 信綱

【後二太政大臣】

【後二權中納言・承久ノ乱ニ斬ラル】

【新宮町誌 右中將藤原保家・陰陽博士阿部晴光ヲ欠ク】

北面

右馬助 源 家長
陰陽博士 阿部 晴光

上北面 略悉皆

下北面 精撰在此中

御先達 權大僧都 法印 覺實

御導師 權大僧都 法印 公胤

以上

一、上皇には正治元年^(一一九九年)(神武紀元一八五九)の御幸より承久三年^(一二三二年)(同一八八一)正月四日の御幸に至る

まで二十三年間に前後通して二十三回の熊野御幸を累ねさせられたり

一、其第一回は前記の如く正治元年八月二十日(一八五九)第二回は正治二年(同一八六〇)十一月

【第一回行幸^(一一九八年)八月御在位中天皇トシテ行幸(一八五八)】

廿八日の御幸にして本巻御幸即ち建仁年間(同一八六一)十月五日の御幸は第三回の御幸なることは業資王記百練抄に明記せるが如くなるも本巻十月十二日の條磐代王子の拜殿に書付けしこととの内に「御幸四度」とあれば右の外尚一回の御幸ありし乎今その年月詳しがならず

一、本巻御幸の御日程を製表すれば大躰左の如きか但し表中王子名の下(文字)は宮地博士の王子考による

日次	御発輦地名	御参拜神社	御事項	御所	御駐所	約里程
五日	讚良庄	攝津 クボツ王子 坂口王子(薬師堂)? コウト(郡戸)王子 天王寺	出給題 三首	木津	讚良庄	
六日	讚良庄	攝津 阿倍野王子 和泉 境王子 住吉 和泉大鳥居(新皇子)	里神楽 相撲	大鳥居	和泉 平松新	

【本書 津井王子ヲ津木トアルモ今改ム(芝)】

十一日	小松原	切部	塩屋王子 ツイ(津井)ノ王子 切目王子	ウヘ(上)野王子 イカルガ(斑鳩)王子	御歌会	塩屋王子	切部	五里
-----	-----	----	---------------------------	------------------------	-----	------	----	----

【本書 田藤王子クリマ王子とトセルモ今訂正ス(芝)】

十日	湯浅 小松原	紀伊 井関王子 沓掛王子 田藤次王子 クハマ王子	紀伊 川瀬(一本ツノセ)王子 ウチノハタ(内畑)王子 愛徳山王子 岩内王子	有相撲等 御歌会	山口 王子	紀伊 湯浅	四里
九日	藤白 湯浅	五躰(藤白)王子 トコロ坂(所坂)王子 蕪坂(塔下)王子 イトカハ(糸我)王子	塔下王子 一壺王子 山口王子 サカサマ(逆)王子		中村 王子	紀伊 藤白	八里
八日	藤白 廐戸御所	紀伊 一瀬王子 ウハ目(馬目)王子 山口王子 中村王子 萬願寺 ナクチ(奈久知)王子 松代王子 祓戸王子	紀伊 地蔵堂王子 中山王子 川辺王子 日前宮 松坂王子 菩提房王子				
七日	平松御所 廐戸御所	井口新王子 浅宇河王子 胡木(新王子) 糀井(糀中)王子	池田王子 鞍持王子 サ野(伏野)王子 廐戸王子	披講 二首	鞍持 王子	和泉 信達 廐戸 王子	
	平松御所	篠田王子	平松王子	和歌 自是停御馬	王子	造御所	

十二日	切部 田邊	" "	磐代王子 三鍋王子 出立王子
十三日	瀧田 辺	" " " " 秋津王子 ミス(三栖ノ王子) 稲葉根王子 アイカ(鮎川)王子 丸 (丸本) 王子 ^x ヤカミ (八上) 王子 一ノ瀬王子	御歌会
十四日	瀧尻 湯川	" " " 重黙(重照又八十丈)王子 大坂本(大板)王子 近露王子	御歌会 非時水 垢離
十五日	湯川 尼南無房	" " " 湯河王子 猪ノ鼻王子 發心門王子	御歌会
十六日	尼南無房 本宮	" " 水飲王子 祓戸王子 本宮神社	舞相撲 等天覧
十七日		本宮御駐輦 川船無	今夜可有 種々御遊
十八日	新本宮	新宮御社 九里峽	乱舞相撲 天覽
十九日	那智新宮	此道又王子數多御座 那智大社	御歌会
廿日	本那智宮	雲トリ 紫金峯ヲ超工給フ	
廿一日	近本露宮	本宮御社	湯河家中小食
	六里十八町		近露
	八里		本宮
	五里		那智
	九里八町		新宮
			本宮
	二里		本宮
	一里九町		三里村 尼南無房
	六里		湯川御宿所
	七里		芝村 瀧尻御所
	四里		田邊御着

廿二日	近 内 露				岩 内 御 宿 所	十五里
廿三日	岩 内 湯 淺				湯 淺	五里
廿四日	湯 淺 信 達			藤 代	和 泉 信 達 御 宿 所	十二里
廿五日	信 達 皆 瀬			大 鳥 居 王 子	攝 津 兵 庫 御 所	十六里
廿六日	皆 瀬 二 條 殿	御還幸				

【???

熊野叢書 第六卷熊野御幸記には 廿五日兵庫を長柄とあり(章)

但し二十七日は御幸中の御雜物を先達に賜ひたるが如し

- 一、後鳥羽上皇は特に當社を尊崇あらせ給ひ庄園を寄進せられたり
- 一、社頭へ菊一御太刀を献納せられ又御懷紙

詠冬日詣那智一首

奇石怪巖晴嵐寒 瀧泉紅落錦文湍

尋知不老神仙藥 靈跡到今海曲檀

一首と贈り給しは承元二年(二〇八年)戊辰御幸の時と記録あれば本巻建仁より八年後(神武紀元一八六八)の御年なるべし

本書は島野宮司自筆の書跡により寫したるなり

中根

龍水モリアン寫す

昭和十五年六月

昭和十五年八月十一日

芝口 常楠寫也

昭和廿五年四月一日うつす

清水 長一郎

熊野王子考上

熊野王子考

宮地直一

予嚮に和歌山縣下を歴遊し、東西牟婁郡に至りしことあり。尋いで昨年の八月大阪府下を視察するや、間を得て攝津及び和泉の諸郡を訪ひ、又本年一月に入り、再び南紀の各地を廻遊すること殆ど二旬、この間所々に王子社の残れるを見、その口碑傳説等を耳にせしこと少なからず。仍りてこゝにその梗概を記し、并せて見聞せし二、三を語らむとす。

佛語に鳩摩羅駄、又究磨羅浮多といふ語あり。翻譯名義集にその義を解きて、是彼八歳已上乃至末娶之摠名也といひ、法華科註に釋論を引きて此云童子と見ゆ。我國に用ゐられて王子と云ふ、その起源はこゝにあるか。早くより大峯山なる藏王權現には十八王子あり、高野山なる天野明神即丹生都比賣神も百二十伴とともに十二王子を従ふ。是等は何れも隨從若くは眷屬の意にして、やがて藥師如来が十二神將を率ゐ、又不動明王が八大童子、辨財天女が十六童子を伴ふに等しかるべし。さて之を我が神祇の上に用ゐたるは、延喜式の記事を初見とす。そは内藏式中、大神祭の幣帛を記す條に、

日向童子幣料盛宮一合

玉列王子幣料盛宮一合

とあり。之を神名帳に照すに、大和城上郡に、

神坐日向神社 ミコニマスヒムカヒノ 大、月次
新嘗

玉列神社 タマツラノ

とあり。この二社はその祭神を詳にせざるも、早くより本宮大神神社の管下にありて、本末の關係

を有したりしものの如し。されば之を古來の慣例によりて表はす時は、枝屬、苗裔もしくは御子神といふに相當すべく、即こゝにいふ王子の義にも一致するなり。次いで起れるは、則熊野の王子社にして、こは己に和歌浦の鶴にもいはれし如く、本宮境内なる若一王子社に始まれるものならむ。

若一又は若宮といふは、古くより天照大神と傳へたれど、そはいかにもあれ、本宮三所、即夫須美、速玉、氣津美御子の三神に次ぎて創められ、三山ともに本社に次ぎて崇敬する社なれば御子神の意を以て之を王子と稱へしにもあるべし。その關係、例へば春日に若宮を設け、大神に日向、玉列の二社あるがごとし。その若宮といひ、新宮と稱し、將今宮といひ、王子と呼ばむ、畢竟ずるに同一の事物を指して、たゞ其名稱を異にするに過ぎざるも、たゞ熊野は人の知る如く、佛教の浸入甚しきが上に、弘く世間の信仰を萃めたる神社なれば、佛教に縁あり、且通俗の稱として應しき王子の號を採用したるのみ。

若一王子に次ぎて表はれたるが、こゝにいはむとする沿道の諸王子社にして、これも佛教の行事に模倣せしものなるべし。王朝の初期より鎌倉時代にかけて、熊野三山に巡歴する風隆盛に赴き、都人の歩をこの地に運ぶもの頻々たりし中に、その特種の風習ともいふべきは、王子の社が発生せしことなり。當時京都を發して本宮を経、新宮那智に詣づる往來の途次、所々にて本宮の影祀を設立するものあり、之を稱して王子社といふ。即世俗にいふ熊野九十九所の王子これなり。

俗説にその義を説きていふ、熊野權現の坐します音無川の水上を一百の數に象り、沿道に九十九ヶ所を充てたるにて、やがて淨土往生の義を示すなりと。之も一理なきにあらずと雖、その最初の時代には、數も具はらず、又必ずしもこれを経由したるにあらざれば、始めよりして、か程の深遠なる意味ありしや否や大に疑はしとすべし。惟ふにもとは往來の要所々に當り、小祠を設立して巡歴の便に供し、併せて遙拜の爲めにせんとせしものならむか。されば、中には古くより鎮座せし社にして、地利の便により後に王子とせしもあるべく、又新に設立せしは固より少からぬことゝす。今日現存せる社につきその縁起を繹めるに、中には往々にして之を古代にかけ、又特種の由緒を傳

ふるもの少からず。かくの如きは、固より悉く之を信憑すべきにあらずと雖も、さればとて、全部が皆虚構の説を語るものとも定むべからざれば、或はこれら諸社の中には、中古王子社に變形せしものもあるにやと思はるゝなり。

さてかくの如く、沿道に起りしその影祀をも王子社といふは、さきに説明せしが如く、新宮又は今宮と稱すると同義にして、やがて若一王子などといふ王子の意を、一層廣義に推廣めしものなるべし。これも俗説にては、若一王子を遷したれば、もとの名に因りてしか名附けたりといふ。固より諸王子の中には、同社の分祀も少からざるべしと雖、その悉くが同神にもあらざれば、決してそれとも定め難し。明月記を見るに、王子社を熊野の末社といへることあり、又任生家古文書の中にも、

熊野山末社藤代王子

と記されたるが、即こゝにいふ王子とは、末社の義に外ならずして、祭神間に於ける本末の關係を表はすものにあらざるなり。即之を傍例に考ふれば、石清水に別宮といふなど、大小の差はあれど、之に相當するものならむか。

今之を典籍の上に徴して、その最初に表はれしものを求むるに、王朝の季までには、

藤代 鹽屋 切目 磐代 瀧尻 近露 發心門

の七社あり、次いで建仁元年^(一一〇一年)の御幸記に至り、その數漸く具はり、實に六十一社の多きに達す。されと思ふに、實は王朝の末に於て略々の形を整へたりしものなるべく、たゞ記録の具備せざるが爲めに之を徴することの難きならむか、御幸記を見るに、大鳥居、井口等新王子といひて、新設に係る社の存せるをしめすによれば、自ら以外の諸社が相當の年代を有しゝこと推量せらるべし。

次に御幸記を基として、その道程並に分布の状況を記さむに、王子の社は先づ難波の地に起る。はじめ京都を發するや陸路鳥羽に至り、こゝより船に乗じて淀河を下り、川尻なる窪津といふに着す。即窪津(又久保津)王子こゝにありて之を熊野第一王子とす。その地後の八軒屋に當り、王子の

舊趾は座摩神社の御旅所となる。これより今の大阪の地を横斷して、天王寺西門の前に出で、阿部野街道を南行し、住吉を經、和泉の海岸に出づ。かくて大凡今の鐵道線路と併行し和泉と紀伊との國境なる山脉を越え、紀川の下流に着す。この後今の和歌山市の東郊を進み、和歌浦の入江を南に廻りて藤代坂に着す。麓に五躰王子社あり藤代王子といふ。社の西、藤代坂を上り、山續きの峯をつたひて在田川の沿岸に下り、湯淺附近の平野を横切つて、山麓に達す。尋いで山を越え、御坊町の東を經て、日高郡の海岸に沿ひ田邊に入る。この間切目崎を廻れば第二の五躰王子なる切目社あり。さて京都よりこゝに至る間は、多少の山脉を越ゆと雖、多く海岸沿の平野にして、道はさしての難路にあらず。されどこれより先は全く海と絶縁して山丘重疊の中に別け入り、暫しの苦痛を忍ばざるべからず。かくて田邊より北行、三栖山を越えて、岩田川に沿ひ進むこと里餘、兩川の相會する所、山の鼻に當りて瀧尻王子あり、五躰王子の第三とす。瀧尻より暫くして道は漸く急に、栗栖川よりは全く山系の中に入る。このあたりに鳥居あり、これを下品下生の鳥居とす。この後山を越え、谷を渡ること幾何なるか知るべからず、その末山勢の漸く平かなむとする所に臨み、發心門王子あり、これ五躰王子の第四にして上品上生の鳥居こゝにあり。こゝに至りて限界漸く開くるも、猶本宮の地は、山背に隠れて之を窺ふべからず、ただ僅かに北方に當りて展望の開くるのみ。されど險坂難路は已に盡き果てゝ、目的の地は將に二里の間に迫り來れるなり。これよりは眞の峯つたひ、次第に道は下りて伏拜に至る。こゝは全く山と離るゝ境、將に神域に入らむとする地所謂本宮を直下に見下して遙拜の誠意を表はすべき所にして、試みにその一角に立ちて眼を南方に放てば、東西に相抱擁せる山脉の中を縫ひて一條の清流あり。その末の將に山の端と觸れむとする所に當り、左に一群の叢林を見る。川は音無川、森は本宮の鎮座地にして、這般の光景は將に一望の中に萃る。伏拜より坂を下ること殆一里、川を渡りて始めて本宮に着するなり。此間の道程大凡八十里、京都より大凡十日の日子を要すべく、今日にありても優に三日は費えぬべし。されば明月記に記して、過山川千遂奉拜寶前感涙難禁、といへるも徒辭ならざるを覺ゆるなり。

熊野王子考 上 終

昭和十五年六月	中根氏の写本をかりて写す	龍水
昭和十五年八月十日	宇井氏より借りて写す	常楠
昭和廿五年四月五日	芝口先生よりかりて写す	長一郎
	清水	

紀伊國王子社略記

予往年和歌山縣東牟婁郡史編纂委員たりし日、同僚の聚來れるを寫したる也。原書内務省藏本なりと云ふ。文学博士宮地直一氏の記述と察せらる。同氏熊野王子考の著あり、上巻前に寫す。此略記は其下巻なりしものか。

中根 七郎 識

本書は宮地博士の著とおもはれず。御幸記に建仁元年十月五日木津を發してクボ津に着、王子を拜することになり居り。宮地博士はこれを以て熊野王子考上に、グボツ王子を以て熊野九十九王子の初とせり。然るに、本書木津の王子を説明するはいぶかし。此王子御幸記にはなき也。王子社の所在としての郡名・村名は旧名により、各社の説明文を見れば紀伊續風土記の記載文と全く同一なり。誰か好事家の編みしものと覺ゆ。

昭和十五年八月

芝口 常楠しるす

神社考定抜抄

王子

中古熊野御幸しはくありし頃、その道間に王子社といふが多くあり。今俗に九十九王子の社ありしといふ。九十九里はその大数にて正しく何十社ありしといふ事詳ならず。御幸記によるに、山城郡・久世郡・木津郷の邊より始めて王子の名見えたり。其文に申始許着木津先約拜王子人々前後会合良久御船着御と見ゆ

【御幸記ニハ木津ヲ發シ申始許クボ津ニ着シ王子ヲ拜セルモノニシテ宮地博士ハ熊野王子考上卷ニハカク述ベタリコトノ記事ト異ナリイカド（芝）】

約拜の二字は拜駒の誤りにて上下になれるならん。今木津の邊に下粕村あり、その地に若一王子社ありて、その神宮寺を若王寺といふ。その社狛にあるより狛王子といひ、同訓の駒の字に借りて書けるにて、先拜駒王子と注せるならん。

是をはしめとして、次に坂口王子・コウト王子、それより天王寺に詣で給ひ、六日阿部野王子、次に住吉社、次に境王子、次に大鳥居新王子、次に篠田王子、次ニ平松王子、七日井口王子、次に池田王子、次に浅宇川王子、次に鞍持王子、次に胡木新王子、次にサ野王子、次に糰井王子、次に厩戸王子、八日信達王子・一之瀬王子、次に地藏堂王子、次に馬目王子、次に中山王子

中山は山中を上下にあやまれるか。前の駒王子があやまれる例もあり、今も山中の驛あり。

されど太平記に紀の中山といふ事見えなれば、中山ともいひにしや。

次に山口王子云々とあり、山口王子以下次に注るすべし。

この記王子の名すへて七十餘見えなれど、他の古事に見えて此記に洩れたるも多し。今社ありてこの記になきも多し。さて奉幣御幸記に見えたる、これは行幸の御時道中にて熊野の神を遙拜せさせ給はん爲に場を設けられしなるへし。元より社あるはこれを用ゐ、これ或は新に社を建てられしも

あり、すへて王子と稱して、地名を配して某の王子と呼ひなせるなり。按ずるに宇多上皇御幸のころはいまざ道間に王子社ありしさま見えず。増基の庵主に、御山につくほどに木のもとことにたむけの神多けれぞ水ノミにとまるとあれば、この頃は水飲の邊に多く小社ありけんを、御幸記にはさるさまにも見えず。今も水飲王子の外なきを思へば、以前は諸王子末社多く、この所にありしを御幸さかりになりて、追々その道路にうつし配りて、事をひろくせしなるべし。されば白河上皇御幸のころより専王子の祝行はれて、道間に多く建る事とはなれるなるべし。

紀伊國王子社略記

芝口云　こゝまで写し來れるところ、各王子社の記事全く紀伊續風土記よりの抜萃とわかりたるにより、茲に畢をとどむ。只参考のまゝに出る社名のミ記しおくことゝす。

(昭和十五年八月十日午後十時)

松代王子	同中村	菩提坊王子	鳥井村界
祓戸王子	同鳥井浦	藤白王子	同藤白浦
塔下王子	海部郡藤白峠	橋本王子	同橋本村
所坂王子	同村	一壺王子	同市坪村
蕪坂塔下王子	在田郡畑村	山口王子	同道村
糸我王子	同中番村	逆川王子	同吉川村
久米埼王子	同別所村	井関王子	同井関村
川瀬王子	同川瀬村	馬留王子	同村小名鹿ヶ瀬
沓掛王子	日高郡原谷村	内畑王子	同萩原村
高家王子	同村	田藤次王子	同富安村
愛徳山王子	同吉田村	九海士王子	同村

【日高郡原谷村ニモ馬留王子アリ】

紀伊國王子社略記終

岩内王子	同岩内村	塩屋王子	同北塩屋浦
上野王子	同上野村	津井王子	同中村
斑鳩王子	同光川村	切部王子	同西野地村
中山王子	同島田村	岩代王子	日高郡西岩代村
千里王子	同山内村	三鍋王子	同北道村
芳養王子	牟婁郡下村	出立王子	同西ノ谷村
秋津王子	同下秋津村	丸王子	同萬呂村
三栖山王子	同下三栖村	八上王子	同岡村
稻葉根王子	同岩田村	一ノ瀬王子	同市ノ瀬村
瀧尻王子	牟婁郡芝村	十丈王子	同大川村
大坂王子	同近露村	近露王子	同近露村
比曾原王子	同野中村	継桜王子	同村
中川王子	同村(碑石アリ)	小廣王子	同村(碑石アリ)
岩神王子	同道湯川村	猪鼻王子	同三越村
發心門王子	同村	水飲王子	牟婁郡三越村
伏拜王子	今伏拜村(今碑を建つ)	多富氣王子	
市野々王子	牟婁郡市野々村	濱宮王子	同濱宮村
佐野王子	同佐野村		

後鳥羽院之熊野御幸度数
及供奉員

後鳥羽上皇熊野行幸（大日本史拔萃）

（一九九年）
正治元年 八月廿 日上皇 幸熊野
九月 八日上皇還自熊野

【建久九年八月行幸？土御門天皇御宇】

（二〇一年）
二年十一月廿八日

（二〇一年）
建仁元年十月五日
十月廿六日上皇至自熊野
四月十一日上皇還自熊野

三年三月十日

（二〇四年）
三年七月九日

（二〇四年）
元久元年九月十七日
十月 六日上皇至自熊野

（二〇六年）
建永元年五月朔日
五月十六日上皇還自熊野

（二〇七年）
承元元年十月朔日
十月廿四日

二年六月三日
七月五日

（二〇七年）
四年四月十六日
六月十四日

（二〇八年）
建曆元年正月閏五日本院幸熊野
二月廿三日本院還自熊野

（二〇九年）
（順德天皇御宇）
元年十一月廿三日
十二月廿三日

二年八月廿四日
十月三日

（二〇九年）
建保元年閏九月廿七日本院幸熊野
十月廿二日本院還自熊野

二年九月二十日

三年十月八日

四年八月十六日
本院修明門院
幸熊野
九月 八日本院修明門院至自熊野

"	六年十	月廿三日	本院幸熊野
承久元(一二一九年)年十	月十六日	"	"
"	二年	三月五日	"
"	三年	正月四日	"

昭和十五年六月 中根氏ノ抄録ヲ借リテ写ス
昭和十五年八月十一日 写ス

芝口 龍
常楠 水

後鳥羽上皇熊野御幸御度数

紀伊續風土記の考定には次の通りになれり

【建久九年八月行幸？】
(一九八八年)

正治元年 八月二十日 業資王記
(一九九九年)

建仁元年十月五日 百練抄
(二〇〇一年)

同 三年 七月 九日 〃

建永元年 五月 朔日 王長記・業資王記
(二〇〇六年) 明月記

承元元年十月七日 仲資王記・百練抄
(二〇〇七年)

同 四年 五月廿三日 百練抄

建暦元年十一月晦日 仲資王記為三廿八日一今捉
(二〇一一年)

業資王記。百練抄
編年記

【承元二年二モ行幸アリタリ】
(二〇〇八年)

建保元年閏九月廿七日 仲資王記
(二〇一三年)

同 三年十月八日 百練抄

承久元年十月十六日 百練抄
(二一九年)

承久三年正月四日 編年記・皇帝紀抄

同 二年十一月廿八日 百練抄

建仁三年三月十日 〃
(二〇〇四年)

元久元年九月十七日 明月記・仲資王記
(二〇〇四年)

建永元年十二月九日 仲資王記
(二〇〇六年)

承元元年六月三日 明月記・百練抄
(二〇〇七年)

建暦元年閏正月晦日 業資王記・編年記・百練抄
(二〇一一年)

同 二年 八月廿四日 業資王記・王薬・百練抄

建保 二年九月廿日 百練抄

同 四年八月十六日 百練抄・編年記・仁和寺日次記

承久二年三月五日 王薬 編年記

計 廿三度

又南紀神社録には建久九年(一九八〇年)八月初度廿八度とあり、宮地博士の神祇史の研究にも廿八度とありとの事也、建仁御幸記磐代王子の條に、建仁元年(一一〇一年)十月十二日御幸四度とあれば、第四回目の御幸と拜察せらるゝを以て、紀伊續風土記のは最初の一回は調べ洩れと思はるゝ。右南紀神社録の建久九年(一九八〇年)八月(之は正治元年(一九九九年)の前の年にあたる)初度とせるがよいやうに思はるゝ也。されば御度数も廿三度よりは多くなるわけ也。後考を期す。
(龍水)

【紀伊名所圖會熊野篇第二卷二 熊野山旧記二云(前畧)後鳥羽院自建久九年二十八箇度也云々】

昭和十五年八月十一日 宇井氏の写本を借りて寫ス

芝口 常楠

（一二〇〇年）
正治二年御幸供奉員は瀧尻懷紙によりて知らるゝのみ也

右近衛大將	源	通親	參議左近中將	藤原	高經
春宮亮	藤原	範光	右中辨	藤原	長房
能登守	源	具親	散位	藤原	隆実
散位	源	家長	右衛門少尉	源	季景
侍從	藤原	雅經	沙彌	寂蓮	

【切目懷紙の今あるものは正治二年に幸の時のものなり
 切目懷紙により供奉員のしらるゝもの下記の外左の二名なり 正五位下上総介藤原朝臣宗隆】

（一二〇一年）
建仁元年御幸供奉員の重なる人々（新宮市誌による）

内大臣右近衛大將	源	通親	權中納言春宮權太夫	藤原	宗賴
右衛門督	藤原	信清	參議左近權中將	藤原	公經（後太政大臣）
從三位	藤原	仲經	太宰大貳	藤原	範光
從三位右大將	藤原	親光（後内大臣）			
右近衛少將	藤原	忠信			
左近衛權少將	藤原	定家	右兵衛督	藤原	隆清
春宮權亮	源	定親	正二位春宮太夫	藤原	忠經
右中將	源	有雅（後權中納言承久ノ役ニ斬ラル）			
因幡守	源	通方	左中辨	藤原	長房（後宗）
皇太后宮少進	藤原	信綱	宮内卿	源	家俊

右馬頭	藤原 親兼	右馬助	
北面	藤原 清範		源 家長

此中に両度の御幸に供奉せられたりと思はるゝは

通親・公經・範光・長房・家長の諸卿也

【前記那智神社島野宮司ノ後鳥羽院熊野御幸考證ニ載スルトコロト官名・人名ニ於テ少シク違ヘル点アリ後考ヲ期ス

(芝口)】

昭和十五年八月十一日 宇井氏の写本によりて寫也

芝口 常楠

熊 野 懷 紙 寫

御幸記による和歌御題

十月 九日	藤 (？湯淺ナラン) 白	深山紅葉	海邊冬月
〃 十一日	切 部	羈中間波	野徑月明
〃 十二日	瀧 尻	河邊落葉	旅宿冬月
〃 十四日	近 露	峯月照松	濱月似雪
〃 十五日	發心門 本宮ニテ披講	遠近落葉	暮聞河波
〃 十八日	新 宮	不 明	
〃 十九日	那 智	不 明	

前に調べ得たる御題

年月不明	藤 白	遠山落葉	海邊眺望
正治二年十二月四日	切 目	遠山紅葉	海邊眺望
正治二年十二月六日	瀧 尻	山河水聞	旅舎埋火
年月不明	藤 白	山路眺望	暮里神樂
〃		古溪冬朝	寒夜待春
		六月祓	山家風涼

この歌二三については

紀伊國名所圖會熊野篇四卷り

以上中根氏調査

庭上冬菊(拾遺愚草)後鳥羽院熊野ニまゐらせ給ひける時

新宮三首御言に庭上冬菊といふことをよめる

(定家)

霜おかぬ南の海の濱ひさしく残る秋の志ら菊

後鳥羽院御製トシテ南紀湯淺誌ニ左ノ五首ヲアゲタリ(紀伊名所圖繪ニアリ)

熊野詣御路次当座五首

春山花 契りけ里神のみしめの山櫻さかふを風の手向とや思ふ

夏山夕 片山の村の蚊遣火霞つゝ春見し色の夕月夜かな

秋山月 おなじ秋のたが里に先詠らむ高き峯より出る月影

冬山曉 小初瀬や峯の木からし夜もすがら吹あけ空の雪の山の端

山羈旅 何となく旅寝の袖もぬれぬべし山の南の松風のこゑ

明日香井集 熊野地にて湯淺の宮にて御歌会ありたるに建保四年八月二十日

山ノ花 山の夕 山の月 山の旅 歌略ス也 紀伊名所圖繪載ス

熊野懷紙

正治二年十二月三日切目御歌会

【本派本願寺 即西本願寺ニ所蔵セラルナリ(芝)】

京都本派本願寺藏 熊野懷紙一卷 後鳥羽天皇宸筆以下 十一通国宝

詠 二首 和歌

遠山落葉

あきのいろはたにのこほりにとゝめをきてこずゑむなしきをちのやまもと

海辺眺望

うら風になミのをくまで雲きえてけふみか月のかけぞさひしき

詠 遠山落葉倭歌

右近衛大將 通親

きりめ山おちのもみちはちりはてゝなをいろのこすあけのたまかき

海邊眺望

あかねさすしほぢはるかになかむれはいりひをあらふな見のい路かな

詠二首 和歌

参議左近衛中將 藤原 公經

遠山落葉

たつた山ふかきこすゑのいろをたにあらしにみすることのはそなき

海邊眺望

なかめやる心のすゑはくれにけりそらよりおちにうらつたひして

詠二首 和歌

春宮亮 藤原 範光

遠山落葉

みわたせはきゝのこのはもちりはてゝあきつをやまはなのみなりけり

海邊眺望

いはしろのまつのこまよりみわたせはゆふ日のいろをあらふしら那み

冬日於切目王子 詠二首 和歌

遠山落葉

^{？正}上五位下上総介 藤原朝臣家隆上

ふるさとはまたしくるらしまさきちるみやまのあられいろかはるなり

海邊眺望

いさりひのひかりにかはるけふりかななたのしほやのゆふくれのそら

詠 遠山落葉 和歌

侍從 藤原 雅經

こからしのおとはかよはぬなかめにもうつれは志るしみねのもみちは

海邊眺望

なかめやるこゝろのはてもはれにけりなみのゆくへのゆふなきのそら

詠二首 和歌

遠山落葉

沙彌 寂 蓮上

よそにみしふもとのいろとなりにけりかさなる山のみねのもみちは

海邊眺望

なかめやるおきのこしまにくもきえてなみにちかつくみか月のかけ

詠二首 和歌

遠山落葉

能登守 源 具親上

みねとをきあらしもいろにあらはれてしくれしあとはまつのひとむら

海邊眺望

なかめよとおもはて志もやかへらん月まつなみのあまのつりふね

詠二首 和歌

遠山落葉

散位 藤原 隆実上

やまこゆるあらしもぬさやたむくらむもみちゝりくるたまかきのに

海邊眺望

わたのはらなみちはるかに見か月のかたふくかたやあはのしま山

詠二首 和歌

遠山落葉

散位 源 家長

もみちゝるやまのはちかきやとならはちりくるいろはにはにみてまし

海邊眺望

なかめやるおきのこしまのゆふけむりいかなるあまのすまゐなるなむ

詠二首 和歌

遠山落葉

右衛門少尉 源 季景上

なをかよふこゝもさひしかをちやまあらしのゝちはこすゑのみかは

海邊眺望

なにかなきなかめのほとにそらくれておとのみよするよさのうらなみ

伏見宮貞敦親王御筆 添状一卷

此懷帑 十一枚

後鳥羽院御製以下

真跡也 尤可奇翫者乎

竹隱子 御花押

飛鳥井雅口添狀一通

切目王子懷紙とも

禁院達觀覽候

盧御然不斜候尤

可有秘藏者也かしく

四月十五日 花押

下間數馬殿

熊野懷紙は後鳥羽上皇熊野御社参の途次、随從の廷臣と共に行はせられたる御歌会御一座の折の懷紙をいふ。現存歌懷紙の和歌のいるしたると、歌人揃との故を以て、古来熊野懷紙の名、世上に喧傳せらる。然し乍ら切目王子御会の時のもの全部西本願寺に現存する外、他の王子の御会のもの昔より既に別々にされ、又近時に至りても分離せらるゝあり。遂にその所在を失するものあるに至れり。

(昭和十四年四月 思賜京都博物館に陳列の時添書)

昭和十五年八月十一日 宇井龍水氏の寫本二より寫也 芝口 常楠

後鳥羽天皇宸筆正治二年十二月六日瀧尻王子和歌会懷紙

一幅 東京市 小倉房藏所藏 …… 博物館ノ表示(以下同シ)

詠二首 和歌

山河水鳥

おもひやるかものうはけの伊かならむしもさへわたるやま河の水

旅宿埋火

たひやかたよものものをちはをかきつめてあらしをいとふうづみびのもと

同日同處和歌会の懷紙一幅名古屋市青木謙太郎氏藏

詠 山河水鳥和歌

右近衛大將 通親

たにかはのいわまのこけやおしとりのたまものふねのとまりなる覽

旅宿埋火

うつみ火のあたりのみかはりいをさすかきねのむめも春しらせけり

同上 一幅 京都市阿部市太郎藏

詠二首 和歌

山河水鳥

侍從 藤原 雅經上

いはかたはいくせのなみをかつくらんたちゐるおしのすゑにおりゐる

旅宿埋火

よもすがらまきのしたをれかきつめてあさたちやらぬうつびのもと

同上 一幅 名古屋市 後藤幸三藏

詠二首 和歌

山河水鳥

散位 源 家長

いはたかはわたるせことにたちさはきうきねさだぬかものむらどり

旅宿埋火

うれしくもけふりのあとのきえやらてあきたついまもねやのとしひ
同上 一幅 京都市 八木清八藏

旅二首 和哥

山河水鳥

右衛門少尉 源 季景上

すみかぬるおしのこゑのみひまなくてつらゝによはるたにかはのをと
旅宿埋火

うづみひのまくらにちかくたひねにははらはぬそてにしもそきえゆく

藤白和歌会 懷紙一幅 京都市 侯爵前田利為藏

後鳥羽天皇御製 詠二首 和哥

山路眺望

ふちしろや山ちはるかにみわたせはふもとにつゝくわかのうらなみ

暮里神樂

たちまはるきねかたもとのふゆかせやうちなひく神のしるしならん

同上 一幅 京都市 津村重舎藏

詠 山路眺望 和哥

侍従 藤原 雅經

なかめゆくふちしろやまのみねつゝきあらしのおともわかのうらまつ

【コノ懷紙紀伊名所圖會二寛文ノ比或人の纂したるを写す云々 今何人の藏なるを知らずとある】

暮里神樂

いくたびの神もあかずやしめのうちにそてふるきねかふゆかくるこゑ

中根七郎氏調査にかゝる

昭和十五年八月十一日宇井氏よりかりて写す

芝口 常楠

紀伊國熊野新宮市官幣大社速玉神社藏熊野懷紙寫三卷之内

藤白王子御会之懷紙一卷

(一二〇一年)
建仁元年十月九日藤白王子御歌会

【湯淺ニテノ御会ナリ(芝)】

詠二首 倭哥

深山紅葉

うはたまのよるのにしきをたつたひめたれみやまきと一人そめけん

海邊冬月

うらさむくやそしまかけてよるなみをふきあけのつきにまつか勢そふく

詠 深山紅葉 和歌

内大臣 通親

和けきつる山また山もかさなればもみちのいろもなをもみちちけり

海邊冬月

ちよをへて月そさへますみくまのゝうらはまゆふみゆきかさねて

詠 深山紅葉 和歌

参議左近權中將 藤原 公經

志くれゆくみ山志けやまわけくてこすゑのいろをおらぬ日はなし

海邊冬月

なみさゆるはまゝつかぜにかたしきのそてよりしろくふゆの月かけ

詠 深山紅葉 和詞

太宰大貳 藤原 範光

われならてたれかきてみむおくやまのまさきのかつらやしほそむるを

海邊冬月

ふゆさむみ月すむよはのわたつみのこほらぬしほにこほりしにけり

詠 深山紅葉

右中將 道 元

もみじばゝ志くれのみかはたつねいるひかすのふるにいろまさりけり

海邊冬月

をきつかぜふきあげのはまにすむ月はしもかほこりかうらのあま

詠 深山紅葉

左近衛權少將 藤原 定家

こゑたてぬあらしもふかきこゝろあれやみやまのもみちみゆきまちけり

海邊冬月

くもりなきはまのまさこにきみかよのかつさへみゆるふゆの月かけ

詠 深山紅葉 和詞

春宮權亮 源朝臣定通

みやこ人はなをのみやはをもふべきもみちのいろもみよしのゝ山

海邊冬月

伊勢のあまのいそへのしものかちまくらかつかぬそても月にぬれけり

詠二首 深山紅葉 和哥

左中辨 藤原 長房

まさきはふとやまはしらすみやまにはきゝのもみち葉あられふるなり

海邊冬月

月みんとまはりなるをいとはねはあまのしほやは風やさむけき

詠 深山紅葉 和歌

因幡守 通 方

みやまふくもみちしにけり冬くれはにしきをひけるこゝちのみして

【一本 み山ふかくもみちしにけり冬くればにしきをしけるこゝちのみして】

海邊冬月

わかのうらの松ふくかせに月すみてなみにやどりぬ冬のよはかな

【紀伊名所圖會二左ノ歌ヲ載アリ】

歌二題(題名省ク)……皇太后宮少近 藤原信綱

わけすつる跡の梢はうす紅葉 色も日數もふかき山かな

風寒み汐くむ海士のぬれごろも よるともいはず月にほすなり

歌二題……左馬助 源朝臣家長

花ならぬ秋のみやまのからにしき たつことやすき木かげならぬを

千鳥なくこよひの後の面かげに 月すむ波のたゝんとすらん

歌二題……藤原清範

おもひはれて深山の秋のからにしき たゝぬかたみの木がらしの風

しほかぜやふきあげの月に雲きえて 霜よりうへにしもぞこほれる

】

同上 瀧尻王子御會の懷紙 一卷

(建仁元年十月十四日近露王子御會ノモノナルベシ)

詠二首 和歌

峯月照松

冬の夜のみねたちはなれゆく月の秋にもにたるまつのか勢か那

濱月似雪

わすれては雪かとおもふ冬の夜の月すむうらのありあけのはま

詠 嶺月照松 和歌

右中將 藤原 通光

松か勢やあたりの雲をはらふらむ伊りがたにすむ山のはしの月

濱月似雪

雪にのみうつりはてぬるころかな千里のはまにすめる月かけ

詠 嶺月照松 和歌

右近衛大將 通親

木の間もる月になかめはつきはてぬいかゝ志のはむみねのまつかせ

濱月似雪

月かけのかはらずみゆるよはの雪に跡つけそむるはまちとりかな

詠 峯月照松 和歌

右近衛少將 藤原 定家

さしのぼるきみを千とせにみ山より松をそ月の色にいでけり

濱月似雪

雲きゆるちさとの濱の月かけは空にしられてふらぬ志らゆき

詠 峯月照松 和詞

参議左近衛權中將 藤原 公經

なかむへきいくよをそらに契るらむ月にことゝふミねの松か勢

濱月似雪

人もさやこよゐの月を三くまのゝ浦のはまゆふ雪をかさねて 【△一本人もいざ……】

詠 嶺月照松 和哥

太宰大貳 藤原 範光

あしきひの山の端いつる月ゆへに松のこまこそうれしかりけり

濱月似雪

月かけのさへゆくまゝに伊とゝしくつもるゆきかと見くまのゝ濱

詠 嶺月照松 和詞

春宮權亮 源朝臣定通

三笠山やどれる松の木のみより月かきおろすみねの木からし

濱月似雪

志ほかせや吹上の濱の空さへて月かけ見する雪のあけほの

詠二首 和歌

左中辨 藤原 長房

嶺月照松

松かせの嶺のあらしに津れなくもみとりにくもる月のかけかな

濱月似雪

見くまのゝうらははまゆうかさねゝど雪にもにたる冬の夜のつき

詠 峯月照松

因幡守 通 方

たかはらや嶺よりいつる月かけ八千と勢のまつをてらすなりけり

濱月似雪

いはしろのはまちにすめる月かけはいつしかふれるゆきとみにけり

詠 峯月照松 和詔

皇太后宮少進 藤原 綱信

志くれにはつれなく見へし松の枝もみなしろたへのみねの月かけ

濱月似雪

雪ならば軒かくばかりつもらましまゝつが枝のとまやもる月

詠二首 和詔

右馬助 源朝臣家長

峯月照松

夜半のつきまつのあなたのやすらひにいてゝもみねをいつるとはなき

濱月似雪

冬きてもまたふりそめぬゆきの色におなし志ら良の夜半の月かけ

新宮市官幣大社速玉神社藏熊野懷紙寫三卷の中 以上にて二卷 残る一卷は正治二年十二月三日の切目御歌会の遠山落葉・海邊眺望にて 前に記したものに同じければ茲に省きぬ。

【紀伊紀伊名所圖會熊野篇一卷 左ノ歌アリ

峰月照松

藤原 清範

いでがたの月のかげさすみねの松まちへばやどれ谷川の水

濱月似雪

冬来てはつきかげさむきはまかぜになみをうけても消えぬ雪かな

全書二左ノ詩アリ

熊野路次瀧尻王子宿即奉

藤原 道憲

山奇靈崛號熊野 一趁永無塵垢襟

月下嵐前膜拜思 當來現世利生心

石門松老攀煙過 巖戸泉寒叩凍斟
本地使地西土主 每憑引接淚難禁
(前二記ス歌ハ近露ニ於ケル会ナリ、コノ詩同時ノモノナリヤ否ヤ？ 近露に全建仁元年御幸記ニ道憲ノ名見エ
ズ)

中根 七郎氏の調べしものニかゝる
昭和十五年八月十一日 宇井氏の写本をかりて寫ス

芝口 常楠

書道全集第十七卷 一七一 熊野懷紙

詠二首 和歌

上総介 藤原 家隆上

谷谿冬朝

しもさえてあくゝるこすゑのくもまよりそのよもわかぬたにのまつかな

寒夜待春

かすむかはゆきけにくもる月かけになをはるをもふあけかたのそら

全 上 第十七卷 一七六 熊野懷紙

【正治二年瀧尻懷紙】

詠二首 和哥

右中辨 藤原 長房

山川水鳥

すみなれぬあちのむらとりさはぐなりいしふりかわのなみやおどろく

旅宿埋火

うずみひのあたりはふゆぞわすらるゝたびのそらにやはるのきぬらん

全 上 第十七卷 一七八 熊野懷紙

【瀧尻懷紙】

詠二首 和哥

能登守 源 具親上

山河水鳥

いはたかは伊くせのなみにすみなれてわたれどのこるおしのひとこゑ

旅宿埋火

ならひきぬあきたつほどになりにけりあたりによはるよひのうつみび

全 上 第十七卷 一八九 熊野懷紙

詠二首 和歌

左兵衛督 藤原 季純

六月祓

みそぎするつもりの濱のうら風にあきかけてふくなみのしらゆふ

山家風涼

月かけのさすともしらぬきゝのはをよすからたゝくにはの秋風

全 上 第十七卷 一九〇 熊野懷紙

【瀧尻懷紙】

詠 和歌二首

沙 彌 寂 蓮上

山川水鳥

いはたかはこほりをくたくすゑまでもあはれとおもへをしのひとこゑ

旅宿埋火

くさまくらあたりもゆきのうつみ火はきへのこるらむほどぞしらるゝ

橋本經亮 文化三 著橘窓自語卷八 日本隨筆大成第一ノ 二正治二年十二月六日瀧尻王子御會ノ熊野懷紙ノ
年死 第二卷所収本ニ依ル
和歌九首ヲ載ス。内前出御製歌並通親、具親、定長、季景、長房ノ歌ヲ除キ其他ヲ左ニ掲グ

詠二首 和歌

参議左近衛中將 藤原朝臣公經

山河水鳥

やまかははいはまのみつのかけとちてこほりにうつるすかのみつどり

旅宿埋火

くさまくらあさたつかせもとさへてなほうつみひのもととわすれす

詠二首 和歌

春宮亮 藤原 範光

山河水鳥

やまかはのいはうつをとにをどろかでいかになれたるおしのうきねぞ

旅宿埋火

うつみ火のあたりハ冬のくさまくらもえいづるはるのけしきなるかな

詠二首 和歌

散位 藤原 隆実上

山河水鳥

やまかけやをちくるみつのせをはやみよとみにつとふあちのむらとり

旅宿埋火

くさまくらあくれはさゆるたひのよにまづたちやらぬうつみひのもと

以上熊野懷紙ハ中根七郎氏の調べられたるものなり

昭和十五年六月 寫

龍水

昭和十五年八月十二日 寫也

芝口 常楠

【補】紀伊名所圖會熊野篇四卷に左の歌を載す

詠曉紅葉 和歌

右中辨 長房

ながむればやましたてらす紅葉かな

有あけの月はのかなれども

詠花有歡色 和歌

散位 源 家長

草木までかをもならさぬあめの下に

おもひ開くる花の色かな

詠曉紅葉 和歌

右馬權助 源 仲家

うすく濃き色こそみ見えねもみちばや

龍田の山のあけくれの空

詠二首和歌

左兵衛督 藤原 秀能

六月祓

みそぎする津守のうらのうらかぜに

秋かけてふくなみのしらふゆ

山家風涼

月かげのさすとしらぬ木々の葉を

よすがらたゝ庭のあきかぜ】

瀧尻懷紙

毛利柴庵氏の
「皇室と紀伊」より

瀧尻王子御會正治二年（土御門朝）十二月六日 橘窓自語
十六己八ニヨル

詠二首

後鳥羽院御製

山河水鳥 思ひやる鴨のうはけのいかならむ霜さへわたる山河水
旅宿埋火 旅やかたよもの落葉をかきつめてあらしをいとふ埋火のもと

詠山河水鳥和歌

右近衛大將 通親

旅宿埋火 谷川の岩間のこけやおしどりのたまものふねのとまりなむらむ
埋火のあたりのみかはかりい^ゑをさすかきねの梅も春しらせけり

詠二首和歌

参議左近中將 藤原朝臣公經

山河水鳥 山河や岩間の水のかけとどて氷りにうつるすかのむら鳥
旅宿埋火 くさ枕あさたつ風も音さへてなほ埋火のもととは忘れず

詠二首和歌

春宮亮 藤原 範光

山河水鳥 山河の岩打つ音をとろかていかなれたるおしのうきねそ
旅宿埋火 埋火のあたりは冬の草枕もえいづる春のけしきなるかな

詠二首和歌

右中辨 藤原 長房

山河水鳥 すみなれぬあちのむら鳥さわぐなり石ふり川の名にやおどろく
旅宿埋火 うつみ火の冬のあたりは冬ぞわすらるゝ旅のそらにや春のきぬらん

詠二首和歌

能登守 源 具親

山河水鳥 岩田河いくせのなみにすみなれてたれとのこるおしのひとこゑ

旅宿埋火 ならひきぬあきたつほとになりにけりあたりによはるよひの埋火

詠二首和歌

散位 藤原 隆実上

山河水鳥 やまかけやおちくる水の瀬をはやみよとみにつとふあちのむらとり

旅宿埋火 くさ枕あくれはさゆる旅のよにまつたちやらぬ埋火のもと

詠二首和歌

散位 源 家長

山河水鳥 岩田河わたるせことにたちさわきうきねさためぬかものむら鳥

旅宿埋火 うれしくもけふりのあとの消やらてあさたついまもねやのもしひ

詠二首和歌

右衛門少尉 源 季景上

山河水鳥 すみかぬるおしのこゑのみひまなくてつゝらによはるたにかはの音

旅宿埋火 埋火の枕にちかき旅寝にははらはぬそてに霜そ消ゆ

(一九二三年)
以上九枚の懷紙のことは橘窓自語にあるものなれど、大正十二年六月若州酒井伯爵家の賣立には、この外に次の一枚を加へ、全部にて十枚と熊野懷紙と標記せりといふ。

詠二首和歌

侍従 藤原 雅經上

山河水鳥 岩田川いくせのなみをかつくらむたちあるおしのすゑにおりある

旅宿埋火 よもすがらまきのしたをれかきつめてあさたちやらぬ埋火のもと

【猶 紀伊名所圖會熊野篇二右ノ外左ノ歌ヲ載ス

詠二首水鳥

沙彌 寂 蓮上

岩田川こほりをくだくすゑまでもあはれと思へをしの一聲

旅宿埋火(補 惜むべし今この歌を逸す)

くさまくらあたりもゆきの埋火はきえのこるらむほどゝしらるゝ」

(附 記)

世に瀧尻懷紙といふものは、(二二〇一年)建仁元年(正治三年改元)十月十四日瀧尻王子和歌会の折のものと紛

るくことあれど、建仁元年十月のときは峯月照松・濱月似雪の二題にて、且つこの時の和歌会は瀧尻王子とせるは誤りにて、日程から考ふれば近露王子にて御催しならんと思はるゝ也。この瀧尻懷紙と云ふは橘窓自語にある通り、その前年の正治二年十二月六日瀧尻王子御会とある時のものなる事明か也。この正治二年御幸のことは悉く傳へられてなきも、百練抄に後鳥羽上皇の熊野御幸と、正治二年十一月廿八日とあれば、丁度十二月六日頃に瀧尻王子へ御着あらせらるし事になれば、よく符号するなり。

(龍 水生)

昭和十四年九月にこの記を作れるに、後中根氏調査のものを借りて写せり。

両者照合を要す

(龍水 再記)

昭和十五年八月十二日宇井龍水氏より借りて写す

(芝口 常楠)

昭和二十五年四月十六日芝口常楠氏より借りて写す

(清水 長一郎)

あとがき

「熊野王子諸関係抄録」とは私が勝手に題名を付けた。

先人達が苦勞して熊野御幸関係の資料を調べられたのが忍ばれる。書写の誤りがあったり、現在の学説と違いがあると思うが、原本のままコピーした。
なお【】内は龍水氏・芝口氏・父が書写の時の追記である。

平成二十(二〇〇八)年四月二十日

清水 章博

